

キャンパスレポーター 研究室訪問

第 3 回

社会政策 石井まこと教授

レポーターの大分大学経済学部 3 年豊東奈津美と大分雄城台高校 3 年江戸裕貴です。私たちは平成 21 年度後期の学問探検ゼミで一緒に学びました。今回は私たち 2 人が石井先生の研究室を訪問して、先生の学問内容やゼミ活動、石井先生ご自身のことについてインタビューします。



ゼミではチームワークが大切

豊東：はじめに、ゼミのを中心に質問させていただきます。石井先生のゼミではどんなことをされていますか？

石井：私のゼミは社会政策という学問体系を扱っています。日本の社会政策っていうのは労働問題と社会保障をあわせたもの。分かりやすく言うと、仕事と暮らして起きる問題をどういう風に解決していくかって

ということです。今私の関心は若い人たちの就職の問題ですね。仕事に就けない問題について、どうしてこんなことが起きているのか原因を明らかにして、調査をして解決策を考えていきます。その事について議論して、色々見方を合わせながら 1 つの解決策を出していきます。

豊東：ありがとうございます。普段、ゼミの学生さんにはどのようなお話をされているのですか？

石井：経済学部では 1、2 年の間は経済学の基礎を勉強します。それから 3 年になり、専門に興味がある人が来ているのですが、その専門に関心が高いかという人と人により差があります。そこで、どんな社会問題に関心があるか探るため、世間話から入っていきます。たとえばアルバイトどんなことしているの？とか、サークルどう？とか。アルバイトだったらお仕事の話、サークルだったら組織運営や人事の問題に話を変えて、できるだけ専門の方にひきつけるようにしています。

ゼミでは勉強も大切ですが、もう 1 つ大切なことがあって、チームワークですね。みんなで自由に議論して 1 つの方向性を見出す。先程いろいろな解決策と言ったけども、いろんな人のいろんな考え方が出てこないといい解決策が出てこないですね。大学というのは答えがわからないことを探すためにはいろんなアイ

経済学部経済学科
社会政策（労使関係）
石井まこと教授

プロフィール



九州大学大学院経済学研究科博士後期課程。
担当授業は労使関係論、社会政策論Ⅰ・Ⅱなど。
主な研究テーマは若年就労問題。
趣味は演劇。

デアを出さないといけない。そのためには自由にしゃべる雰囲気がないといけないので、その雰囲気を作るように配慮をしています。ゼミコンパ、これは必ず参加してもらいます。みんなでやるときには参加する。合宿にも必ず参加してもらおうとかね。合宿をやると24時間一緒にいます。いろんつながりが出てきます。あと、ゼミの日はいつまでゼミやるかわからないので、その日はバイトを入れないようにしています。

豊東：時間は特に決まってないんですか？

石井：決まっていません。とにかくみんなで最後まで付き合おうよという風にして、集団で行動するときは集団のルールでやっていくという最低限のルールにしています。

豊東：ゼミでは班ごととかいうのではなく、全員で話し合ったりすることが多いんですか？

石井：班ごとでやる作業に懸賞論文の作成があります。経済学部では恒例行事で賞金を出して論文を競わせています。1等が10万円です。

江戸：へえ～！

石井：この論文を3年生のときに作ってもらっています。ゼミはだいたい1学年12人ですが、12人でつくるのは難しいから3グループか2グループにわけで行います。昨年3年生は杵築や国東に行き、「派遣切り」の実態を調べに行ったものをまとめました。賞は取れなかったけど、良い経験になったと思います。懸賞論文以外では、ゼミ運営には係制をとっていて、ゼミ長の他、コンパ係とか会計係とか何かの役割を振っています。

江戸：では次の質問です。僕は、大分大学の経済学部を志望していますが、ゼミに入るまでにどんな勉強とか準備が必要ですか？

石井：大学に入るにあたってはいわゆる受験勉強、セ

ンター試験に対応する勉強が第1です。ただし、先程言った1, 2年の基礎が終わって大分大学経済学部の場合どこかのゼミに所属することになります。ゼミに入ると、問題がしぼられていきます。その問題と全体がどのような関係なのか理解できることが大切です。木をみて森をみずにならないことです。最も身近で、社会問題を扱っているのが新聞です。新聞の活字を通して自分が一番関心のあるところをちゃんと押さえておくことをお勧めします。新聞を読む癖をつけるとあとあとまで役に立ちます。

ワーキングプアを予防する学問

江戸：次に先生の専門分野についてできるだけわかりやすく教えてください。

石井：わかりやすく言えば貧困予防です。貧困という言葉は最近良く使うようになってきたのですが、実は日本というのは貧困という言葉をしごく嫌っていた国です。特に貧困という言葉には拒絶反応があってワーキングプアとわざわざプアという言葉を使うのもそうした名残です。最近では貧困問題がかなり語られるようになったため、説明しやすくなっています。

ただ、元々経済学も貧困予防の学問です。国民が貧困にならないための学問です。なにか経済っていうとお金儲けであるとか、個人に資する学問のように誤解されがちですが、基本は貧困予防です。働いているのに貧しい状態なのはどうしてか。働きがいをもって仕事ができるにはどうしたらいいか、もしそれができないとしたらどういうところに問題があるかを考えていきます。仕事と暮らして表裏一体なのですね。ワークライフバランスという言葉がありますが、日本は労働時間が世界で最も長い国です。どうやって短くして労働時間以外のところを充実させるか、重要な研究課題になっています。



豊東：私たちの生活と密着したことです。仕事と生活。先生の研究内容で、仕事についてっていうのが出たのですが、これから日本の雇用形態はどのように変化していくと思いますか？特に私は3年生でもうすぐ就活が始まるので、新卒者雇用についてすごく気になります。

石井：今までは新規大学・高校から出て1つか2つくらいの会社で継続雇用が典型でした。この長く働き続けるということは非常に意味があることです。スキル（仕事のやり方）が蓄積されていきます。色んな仕事をしていくっていうこともあります。色んな仕事をしていても仕事に関連性がないと伸びていきません。高度な社会になってくればなるほどそういうスキルが必要なので、こういう長く働く仕事っていうのは残っていくでしょう。ただこれを全員がやれるかというところじゃなくなっているのです。継続しての雇用は今のままではその割合は減ってくるでしょうね。若干少子化があるからそのペースは今ほどではないかもしれないけど減ってくるのは確かです。そうすると、色んな仕事をつないでいく人たちが



が増えていきます。そこではスキルが評価されにくく、賃金とか待遇が悪くなります。今まさにその問題を抱えています。これをどうするかという問題が出てきます。その時にこの人たちがどのようにしたら働きがいをもってやっ

ていけるのが鍵です。

重要になってくるのは、これは僕の考えですけど、教育と仕事が融合しないとだめだろうと思います。今までは社会に出たら、企業が全部教育していました。優秀な人材は会社の資源になるからです。教え込んだから離さないわけですね。ところが景気が悪化し、会社に余裕がなくなってくると、それを一部に絞こむようになりました。それ以外の人たちはスキルがつかないために、社会の変化についていけなくなり、ほったらかされることで社会から分離しちゃいます。そう

すると社会がすごく不安定になる。それは長期雇用の人にとってもあまりよくないことです。

社会が分離するという事は、具体的には社会保障に影響していきます。あの人たちと一緒に保険に入りたくないとか、段々みんな背を向けて、治安にも影響します。そうならないようにするためには必要とされる教育を、企業ができないのであれば公的に保障する。例えばこういう人材がほしいということになれば社会で教育をしていき、そのためのお金を何らかの形で集めて教育訓練していくのです。

ヨーロッパなんかはかなり進んでいます。ヨーロッパはもう日本よりも早くから若い人たちの問題があって、仕事に就けない若い人たちがたくさんいます。その人たちをある程度お金を使って教育訓練をしています。だから仕事と教育を行ったり来たりしながらやっていくという形が出来ています。今後、仕事と教育が密着した関係になり、大学なんかもちょっと形が変わってくるかもしれません。

豊東：仕事に密着した、ということですか？

石井：今後、18歳人口が減ることは避けられません。そうするとそれ以外の世代で例えば30代40代途中でもっとなにか能力つけたいとって、少しの期間、大学なんかで勉強してまた出てくとか、そうした仕組みが必要になってくるのではないのでしょうか。また、安心して学べるようにその間の生活保障も得られるような仕組みも必要です。

豊東：みんなが平等に教育を受けられるようにですね。

石井：そうです。スキルをどんどんつける人はつけければいい。そして教育と仕事とのバランスを取る人はそれを選択できる。そういう選択肢が出てくるのが大切です。

高校と大学の勉強の違い

江戸：ありがとうございます。次に高校と大学の勉強の違いについて教えてください。

石井：高校の勉強ってどういう風になっている？

江戸：クラスみんなで授業を受けて先生が黒板に書いたことをノートにとって自分たちで勉強していくっていう形が一番メインだと思います。



石井：豊東さんは？

豊東：私は、高校は大学に入るための勉強をしているような気がして、大学は社会に出るための勉強をしている感じがします。

石井：社会に出るための勉強ってどういう勉強ですか。

豊東：教育学部だったら教員免許をとったりだとか、自分の手に職をつけるじゃないけど、自分自身プラスになるようにというか。高校は大体みんなが同じように勉強する感じですけど、大学はやる気のある人は資格とかたくさんとったりするし、逆にちょっとやる気がないっていうか、だらけてしまう人はだらけてしまうので、そういうやる気に違いがあるように思います。

石井：そういう意味では江戸さんと豊東さんの話、次のステップのためのいわゆる蓄積という理解は共通していますね。大学の勉強は次のステップに行くための準備段階です。企業もそれを期待しています。ところが一方で、大学というのは自由にいろんなことが考えられる時間と空間に意味があります。時間は4年間。高校より長い。

江戸：そうですね。

石井：高校より長いのが休みです。ざっと、4、5ヵ月あります。

大学では長い夏休みの過ごし方が大切

江戸：長いですね！

石井：長いですよ。その間、集中講義っていうのがありますが、高校みたいに補習とかそういうのは極めて少ない。工学部とか医学部とかある程度次のステップに行くために一定の基礎的な力が必要とされる場合には補習はあります。経済学部でも英語や数学の補習を行っています。

でも、かなり自由な時間が出てきます。その時間は自分でいろいろ組み立てられます。その時間を使ってゼミ合宿に行ったりとか課題を出したりとかはしています。時間がたっぷりあるはずなので、ゼミでは、集まるまでにいろいろ本を読み、自分がそのテーマについて学んだ事を披露してもらいます。

例えば若い人たちの就職問題について、どういう風な対策があるかということを出し合っていきます。正解はありません。正解はみんなが豊かになることとか働きがいを持つこととか、そういう風に万人の幸福感ってあるけど、ただそこにいくまでに色々な解法があるわけですよ。これが1番いいということは言えません。それをみんなでいろいろと話し合える。それを楽しむ。それが何の役に立つと言われるとすぐには役に立たないかもしれないのだけれど、僕はそれが1つのコミュニケーションをつくっていく、みんなで少しずつ考えていって何かを作るプロセスを味わうことになるのではと思っています。結局どこかみんな違う考え方をもっています。でもどこかで何か合意しないといけない。そういうときにみんなで語りつくしてやっぱりここかというふうなプロセスができる時間をとれるのは、大学生の時しかありません。

本と映画に熱中した大学時代

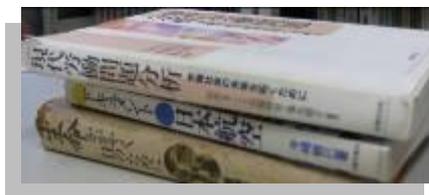
豊東：では次に石井先生個人について質問させてください。石井先生の学生時代について教えてください。特に高校と大学時代に感動した本などありましたら教えてください。

石井：僕は中学生ぐらいまでは本は読まなかった人です。高校の途中ぐらいから、ある人に勧められて本を読むようになって、それが今につながっています。斉藤茂男さんっていうルポライターが書いた「生命（いのち）輝く日のために」という本があります。ダウン症（※ 染色体の異常によって生じる疾患）のお子さんをもったご両親のいろんな決断や苦悩が書かれています。生を受けた喜びがダウン症によって暗転するのですが、それをちゃんと引き受けていくことで、違った社会の見方が出来るようになっていきます。そのプロセスが克明に描かれています。色んな人たちがいて障害をもって社会の中に出てきたときに社会はどう受け止めないといけないのか。ここに書いてある人たちは自分で何とか受け止めようとしている努力が、裏を返せば社会がそれに対して冷たい視線を持っている事に気がつき、ショックでした。これをきっかけにいろんなルポルタージュやノンフィクションの作品を読むようになりました。これが社会問題に関心をもつきっかけになりました。

それから、今崎暁巳さんの「ドキュメント日本航空」という作品も心に残っています。労働組合という、企業で働いている人たちが自分たちの労働条件をよくするために組織を作ります。極めて正しい行動です。法律でも認められています。ところが、労働条件向上に腐心しない会社にももの申すと、会社からいろいろと差別を受けます。それに屈せず、安全のためには整備士がもっと必要であるとか、無理なフライトはさせないようとか、いろいろとずっと会社側に提案してきたということが克明にかかれています。実は、高校生の時、パイロットになろうと思って勉強していました。パイロットになれば航空会社に入るわけだけど、航空会社の中がね、かなり大変だっということがこの本を読んでわかって、じゃあもっと詳しく知ろうというので、勉強するならば労働問題をしようということ

で少しずつ労働問題に入っていました。山崎豊子さんが後に小説にした「沈まぬ太陽」がありますが、最近では渡辺謙さん主演で映画にもなっています。

江戸：そうなんですか。



石井：「沈まぬ太陽」はゼミ生みんなと一緒に観に行きましたよ。

豊東：この本を読まれたのは大学生のときですか？

石井：大学生のときに読みましたね。大学生は時間があるからいろいろとできます。旅行に行ったり、本を読んだり、みんなと話をしたりして、その中で、無駄とも思える時間が後から振り返ると何かにつながっていたりします。そういう意味ではすごく楽しい時間ですよ。実は、本よりも映画が好きです。いろんな映画を観ましたよ。昔の映画をたくさん。チャップリンの映画だとかサウンドオブミュージックとか、たくさん観る時間を持ってました。映画館なんかで昔の映画をやっていると、授業をやっているのに、この時間しか見られないからと理由をつけて、観に行ったりもしました。



だから今でも出席にはあんまりうるさくありません。あんまりこういうこと言えないのだけれど、映画を観に行くという行動もそれとちゃんと意味があることだから。あんまりこういうこと言うといけないね。

演劇をやりたくて九州に戻る

江戸：大学の先生になろうと思ったきっかけは何かありますか？

石井：大学の先生になろうとは思っていませんでした。



江戸：そうなんですか？

石井：自分にはこの職業は無理だと思っていましたし、当時はあまり仕事に魅力を感じませんでした。この人みたいになりたいなっていう人にあまり出会わなかったのが原因だったような気がします。1時間半一方的に話をして、それでなかなか魅力を感じてもらっているのは相当な力が必要だと思います。私の大学時代のゼミは、私1人に先輩が1人という2人でした。先輩が卒業すると、大学院生と一緒にゼミをするようになり、それについていく中で徐々におもしろくなっていました。先生の講義は、最初は決してそんなにおもしろいと感じませんでした。ただ、ゼミでいろいろとしゃべる蘊蓄とか、先生が持っている経験を聞いているうちに少しずつおもしろくなっていったという感じでした。それでも大学の教員に全部投入しようっていうまでには至りませんでした。高校の時から演劇をはじめ、大学でも演劇していたので、就職するとね、演劇が出来なくなってしまうと思ってね、就職活動も真面目にせずにといたら、残った選択肢が大学院でした。取り扱っているテーマには関心がありましたし、労働問題にすごく有名な先生だったことや、大学院の人達と一緒にいると、大学院おもしろいよ、おいでおいでっていう風になり、気がつけば大学院生でした。

大学の教師になろうと思ったのは就職してからですね。大学院が終わり、労働科学研究所という、神奈川県にある労働負担の研究をする研究機関に研究員として勤めました。労働負担というのは、夜起きて仕事している人、例えば看護師さん、あるいは製油所があったりすると24時間監視する必要があるけれど、そうした人たちが眠なくなったら安全に問題があるとすると、どうしたら意識レベルが高いままで仕事が

出来るかっていう研究をします。原子力発電所のコントロールルームなんかも調査したことがあります。製油所の中に行って24時間ずっと働いている人と一緒に何をやっているか記録したり、脳波計をつけて、どういう覚醒レベルになっているか調べたりしました。結論は簡単に言えば、どこかで休憩をとって仮眠をとるのが一番ということです。休まないで注意レベルが上がらないから仮眠のスケジュールを作るっていう最終的な解決法をデータに基づいて提案していました。

現場回りをずっとやっても良かったのですが、芝居をやるためには九州に戻りたいというのがありました。そこに、ちょうど大分大学で募集があり、そのときは大学の先生にそんなに抵抗感がなく応募してしまいました。そしたら運よく呼ばれることになり、現在に至ります。遮二無二というよりも自然の流れでそうなっちゃったっていう感じですね。ただ、労働問題には相変わらず問題意識を持っていました。働く人達の立場が弱いなかで、どうやって対等に話し合っただけで労働条件を決められるかっていうことは、仕事で生計を立てている我々にとって根幹の問題なんじゃないのかと考えるようになっていました。一方で、芝居はずっとやりたいというのがありました。

豊東：じゃあ芝居と研究が根幹にあるっていう感じですか？

石井：そうですね。でも芝居はもうしていません。芝居は、子供が生まれてからできなくなりました。かれこれ10年ぐらいやっていません。それまでは福岡で、社会人達と一緒にやっていました。

豊東：劇団みたいなものですか？

石井：劇団です。

豊東：今でも芝居を観に行ったりするんですか？

石井：観ますよ。演劇ができないので、今は鑑賞が唯一の楽しみです。



若い人の就職問題を解決したい

豊東：最近どんなニュースに関心をお持ちですか？

石井：演習生として4年生をもっているのですが、若い人たちの就職の問題はまずやっぱり気になりますよね。あともう1つは、入った後も気になります。入ってからその会社でキャリア形成していくことが難しくなっています。人材育成への投資を抑えていて、短期的なコストダウンをしている会社が増えています。その時、対等な関係であれば、いろいろと会社側に要望できないといけない。その基盤が今非常に弱くなっています。競争社会なので、例えば、あなたがそういう風に言うのであれば、他の人がいるよってすぐに言われてしまいます。今までだったら正社員っていう1つの枠で守られていましたが、会社側も競争社会に順応しようとして、守れなくなっていっています。政府もいろいろとやっていますが、最終的には自分たちでやりなさいということになりがちです。でもこれでは問題は解決しません。自分たちが主体的にどうやって労働条件をよくしていくかっていうところの問題ですね。

別の関心としては、アメリカのオバマ政権の動きです。期待していましたが、悪い方向にいっています。アメリカっていうのは OECD 諸国の中で唯一医療保険を持ってなかった国ですが、彼がそれを作った。それは評価できるのですが、片方でアフガニスタンっていうところにたくさんの兵隊を出してアメリカの若い人たちが送られ、かなりの死傷者も出しています。医療は確かに進んだけど、一方で軍事という問題で犠牲を出してしまっているところで政権をどう評価すべきか考えてしまいます。ところで、江戸くんは今何に関心を持っていますか？

江戸：関心ですか？そうですね。今はもうとりあえず勉強が必死ですね。

石井：就職のこととかそういうのは？

江戸：今のところまだ就職までは。自分で何がしたい

かイメージが具体的に絞れていないので、しっかりみつかってないです。

石井：どういう方面とかいうのはあるの？

江戸：パソコン使ったりするのが好きなので、できればそっちの事務的な方が好きですかね。



石井：経済を志望していますよね？

江戸：はい。経済学部で地域とかそういう方向の面も学んだ上で仕事を見つけれたらいいなと思って経済学部を志望しています。

石井：ぜひ新聞をいろいろ読んでください。

江戸：はい。そうですね。早いうちから新聞読み始めようと思います。では、先程もちよっと聞いたんですが趣味について教えてください。

石井：趣味は10年前までは芝居だったのですが、今は芝居を観ることですね。あと、やっぱり家族と過ごす時間が大切です。別府に住んでいるので、冬場になったらしょっちゅう温泉ですね。いいですよ。

豊東：お子さんはまだ小さいんですか？何歳ぐらいですか？

石井：上が小学校2年生。下がまだ3歳です。

豊東：かわいいですね。じゃあまだパパのことが嫌みたくないことはないんですか？

石井：そのうちなるよね。中高になったらだんだん離れて行って。でも今ゼミ生に聞いてみると、大体高校生ぐらいが父親嫌いのピークなようで、それ以降は大丈夫みたいです。だいぶ最近の父親像は変わってきた

みたい。



ワイワイガヤガヤやるのが好き

豊東：では、石井先生がいつもエネルギッシュである秘訣を教えてください。

石井：豊東さん僕の授業受けたことあるの？

豊東：ないですね。お見かけする時いつも元気なイメージがあるので、エネルギッシュなのかなと思って。

石井：芝居をしていたせいもあるのかもしれないけど、ライブ感覚が好きです。特にお祭りは好きですね。とにかくみんなでワイワイガヤガヤやるのが好きです。だから自然とそうなるっちゃうのでしょうか。

豊東：じゃあ1人で本を読んでいるより、みんなで行こうっていう感じの学生だったんですか？

石井：そうです。とにかくみんなで何かをするのが好きです。

豊東：大学の先生って本読んだりするのが好きっていうイメージがありました。

石井：さっき言ったように僕は大学の教員にストレートであがってくるっていうよりもいろいろと迂回して演劇が出来る環境としての大学教員っていうのがあって、そのうち主客が逆転してしまったという形ですから、少し変わり者なのかもしれません。ただ、教

員は声を出すことが多いから、そういう意味では演劇は役に立ちますよね。

豊東：声が通りますよね。

石井：腹式呼吸をやっていますから。そういう意味では全く無駄な作業ではなかった。だから何がどこで役に立つかわからないんですね。

江戸：学生時代、高校とか大学の時にやっておけばよかったなと思うことはありますか？

石井：演劇もしたし、みんなでいろいろ旅行も行ったし、留学生と一緒に中国に行き、山登りもしました。ある時は、ピースボートっていう船があって当時ベトナムとかカンボジアとかに行ったりもしました。やりたいことはやれたのでそんなに悔いはないですね。あるとしたら、結構そうやっていろいろと動いていたので、もっと本を読む時間があつたらとは思いますが。今でも本を読めますよ、でもその時に読んだ記憶を残しておきたかったなあ、と。あの時はこう読んだけど今はこういう風にとということをもっとできたらと思います。

豊東：昔読んだ本を今読んでみるとその時と感じ方が違ったりしますか？

石井：そう。違いますよ。全然距離感が違います。なんであの時にこういう風に感じたのだろうかとか、その時は気づかなかった点を気づいたりするのは楽しいですね。でも基本的には最初に読んでいいと思った本はずっといい本ですね。もう亡くなられましたけど、井上ひさしさんの「きらめく星座」っていう本があるんです。その本もものすごく好きで、その中に1つ「人間は奇跡の連続である」という名文の台詞があります。宇宙



の中で自分たちが生きているこの時間はまさに奇跡的な時間である、いろんな奇跡が重なり合って今この瞬間がある、というようなキャッチコピーがあってすごく好きでね、よかったですね。

そんな出会いがあるので芝居の世界はいいなあってどんどん引き込まれていきました。みんなで2時間3時間一緒にライブの時間を楽しめるっていうのがいいです。逆にその時間、公演までにかかなりの時間とるんですよ、それもいい勉強になりました。劇団はくっついたり別れたりっていうのも結構あるんですね。社会人の人とも一緒にやっていたので、社会人の世界も知ることが出来たので経験としては満足しています。ただ、語学をもう少し頑張ればもっともっと世界がひろがったのではという思いはあります。語学といっても英語だけでなくいろんなヨーロッパの言葉とかね。あとアジアですよ。

留学生との付き合いが学生時代の思い出

豊東：さっき留学生と一緒に中国に行ったって言われていましたけれど、留学生との関わりってどういうところであったのですか？

石井：学部ときはチューターをしていました。

豊東：私もやっていました。

石井：チューターで最初はマレーシアの方でした。お願いされたのでその子に勉強を週に1時間ぐらい教え、別にいろいろ情報交換していました。次は大学院の時同じ研究室に留学生がいて、夏に帰るから一緒に行かないかっていうから上海から蘇州、無錫（ムシヤク）に行きました。ついでに黄山（ファンサン）っていうのがあってそこに8時間かけて登りました。

江戸：8時間！？結構かかりますね。

石井：そこにその留学生と1週間くらいいて。当時中国はすごく安かったから。アルバイトして行きましたよ。ぜひ大学に行ったら海外に1人で行ってみてくだ

さい。

江戸：1人ですか？

石井：友だちと一緒にいってもいいけど、自分の力で行くといいですよ。なぜか知らないけど帰ってくるとね、世界が変わりますよ。すごく心が広がるから、いろんなものに優しくなれます。心が広がって帰ってきて、自分の悩みの小ささに気がついたりします。世界のいろんなところに行って自分1人いて、さみしさというよりも世界の中に自分がいるっていう感じを持てます。その感覚で帰ってくるので自分の視野がとてひろがったような気がします。言葉の通じないところで、何か片言でいいからいろいろとやって、それが少しでもつながるとその達成感もあります。つながるっていう達成感と、もどってきたときに心のスケールが広がっているので、いろんなものを受け入れる力ができます。だからぜひ。大分大学に来るとIBPっていうクラスがあって、4年間のうちに半年くらい海外留学させるプログラムがあります。その費用は経済学部の卒業生の篤志家からの寄付で賄われていて、少ない経済負担でも海外生活ができます。もちろん、語学はちゃんと勉強してもらわないといけません、経済学部には外国人教員もいるからそこで勉強することもできます。IBP以外にも色々と学べます。今後はいろんなコースを作ってみなさんの期待に応えていきたいと思います。大学は講義以外にもいろいろ挑戦できる時間があるので積極的に挑戦してくれればいいですね。

江戸：いろいろ考えて休日の使い方を考えておきます。

大学でいい仲間をつくること



豊東：最後になりますが、高校生と大学生へのメッセージがありましたらお願いします。

石井：高校生、大学生どちらも共通するけど、僕は大学で

重要なのはやっぱりいい仲間を作ることだと思っています。高校もある程度はそうですが、大学は色々な地域から集まって来ます。出身地も違うし、現役で来る子もいれば浪人してくる子もいます。一応同じ学部を目指したということで勉強したいテーマは大体一緒のはずですが、色んな人たちがいます。その人たちの中で自分の一生の友というか、そういうのを探していくという場なので、ぜひいい友だちを作っていただきたいというのが、まず1番目のメッセージです。ゼミはそういう場だと思っていますので、できるだけ一緒にいる時間が長くなるよう合宿行ったりとかゼミのコンパをやったりとかしています。

議論しようっていったって人がいないと議論できない。勉強しても誰かがいないと励みにならないとかあります。やっぱりどうしても一緒に考えられるという存在は重要です。僕ら教員の世界もどうやって伸びているかという大学院の時に勉強した仲間が、学生時代のように合宿していろいろ自由に議論し合うなかで自分の研究のスタンスを補強しています。自由に議論できる、自分のすべてを知った上で話ができるっていうのは何物にも代えがたいものがあります。貧困研究している湯浅誠さんっていう人は知っていますか。

豊東：派遣村の村長さんですよ。

石井：そう。彼はこうした関係を「溜め」と呼んでいます。「溜め池」の「溜め」。溜め池が大きければ大きいほど、いろんなショックを受けた時に復活しやすい。自分が勉強して蓄えた知識も「溜め池」の「溜め」の部分だけど、これだけでは弱い。勉強するには動機が

必要です。動機はどうやってできるかという、社会や他者との関係からしか生まれません。1人でじっと考えたって自分を知ることは難しいし、動機も出てきません。誰かとぶつかり、何かの刺激があって動機は出てきます。その刺激を作ってくれるのが友だちや社会です。

社会や友人とできるだけ関係をもつ場として大学は最適です。まわりを見渡せばいろんな友人たちがいますし、価値観も違う、考え方も違う人が自由に議論することを保障しています。行こうと思えば海外にも行くことが出来るし、その費用をアルバイトで稼ぐこともできる。つまり、いろんな自己決定が出来ます。20歳になればお酒を飲むこともできる。そういう意味では「溜め」を増やすいい時期なので、知識、好奇心、人脈をぜひ少しでも大きくしてください。これは大学・高校共通ですね。いろんなことをやって自分が楽しいと思うことをどんどんやっていけばいいかなと思います。そこに大学の講義や演習を組み合わせしていくということをしていけば、大学4年間は決して無駄な4年間にはなりません。

自分の懐の深さを増やしていく作業は、卒業して10年くらいたないとわからないかもしれません。30とか40とかになって、ああ、とか気がついたりします。だから今はがむしゃらにいろいろとやって当たって砕ける。いろんなことやって失敗してもそれはリカバーができます。少しでも自分の懐を増やそう増やそうって貪欲であれば運も転がってきます。一方で、一緒に時間を共有する仲間の存在が重要です。僕もこうやって大学の教員をして楽しいのは学生さんと時間が共有できるときです。教員の楽しさは教員になってから気づきました。なるまではわかりませんでした。

豊東：イメージしていたものとは違いましたか？

人と違うことを言おう

石井：違いますね。私が実践している教育は私の先生から受け継いだものです。私の先生が実践している教育スタイルを下敷きにしています。私の先生の教えで重要と考えているのが、とにかくゼミでは人と違うことを言いましょうということです。教員とも違うこと



を言いなさいということです。できるだけ違うことを考える訓練をすることです。同感だけだと話が終わってしまいます。そういう教えを受けられたのも先生との出会いがあってです。出会いはすごく大切です。自分1人で伸びようっていうのは限界があります。だから人をどんどん巻き込んで大きくなっていけばいいですよ。私の苦手なものに個別社会に関する領域があります。個には限界があり、個別では社会を形成できません。なのに社会を形成できる幻想があるようで、非常に注意して見えています。

豊東：本日はとても貴重なお話をありがとうございました。私は特に最後の、先生が言っていた、人との出会いを大切にというのが心に残って、大学生活もあと半分もないのですがこれからいろんな人と関わっていろんな出会いを広めていきたいと思いました。ありがとうございました。

江戸：僕は大学の休みが思ったよりも多かったのも、その時間の使い方も考えて自分の好きなことを勉強して大学に入ってからいろいろやりたいなと思いました。ありがとうございました。できるだけ早めに考えていろいろ実行したいと思います。

キャンパスレポーターを終えて

大分大学経済学部3年 豊東 奈津美

今回、キャンパスレポーターを通じて石井先生から様々なお話を聞くことができました。

はじめはとても緊張していましたが、インタビューを進めていくうちにだんだんと緊張感も解けていき、とてもなごやかな雰囲気の中で、楽しくインタビューをすることができました。石井先生のご専門が雇用にかかわる分野でしたので、就職活動を控えている私にとって関心が強く、どの話も興味深く聞くことができました。その中で一番印象に残っているのは人との「出会い」についてのお話でした。特に学生時代の「出会い」は自分自身にとってかけがえのない宝になると思いました。また石井先生が大学の教師になった大きな理由の一つが研究と芝居をしたかったという話を

お聞きして、少し驚きました。そこまでしても続けた何かがあるということはどうやら素晴らしいことだなと思いました。就職活動を控えている私にとってこの時期にキャンパスレポーターをやれたことはとても有意義な経験になりました。この経験を残りの大学生活の充実に向けて活かしていきたいと思いました。

大分雄城台高校3年 江戸 裕貴

今回、キャンパスレポーターに参加させていただき、今まで考えていた以上に大学について様々なことを詳しく知ることができました。お陰で、大学進学への気持ちが一層強くなりました。

僕が大学3年生の豊東さんと訪問した経済学部の石井まこと研究室は、はじめはどんな先生かわからなかったのもとても緊張しました。しかし、石井先生はすごく気さくで明るくインタビューに応じて下さいましたので緊張感は直ぐに解けました。

石井先生へのインタビューを通して「コミュニケーションの大切さ」が最も強く印象に残りました。僕は誰とでも積極的に関わることを心がけていますが、コミュニケーションのとり方について改めて振り返る機会になりました。これからもたくさんの人との出会いを大切にしながらコミュニケーションのスキルを高め、様々なことに挑戦していきたいと思いました。



レポーター

経済学部3年

豊東 奈津美さん

大分雄城台高校3年

江戸 裕貴さん

インタビュー実施日 2010年8月26日